

## 2 黄碧松先生の談話

### 「台湾中医の特徴」



黄碧松先生は、台湾の伝統医学会理事長や中医肝病医学界理事長などを歴任され、中国遼寧、広州、湖南の中医薬大学の客員教授もされている。現在は、ご自分のクリニックで臨床をされながら学会活動や中国との交流活動を活発に進めておられる。

今回、事前に提出した質問書に対してA4用紙14頁に及ぶ詳細なご回答をいただいた。以下概略を紹介する。

1. 台湾中医の歴史と概略
2. 日本の方証相対論が台湾中医に及ぼした影響
3. 大陸中医は劣化している
4. 台湾中医が中医の聖地になるだろう

## 1 台湾中医の歴史と概略

### 1. 日本統治以前

明末に鄭成功の長男・鄭經が大陸から入台したときに、兵士や随行移民が台湾の水に合わず大量の病人が発生したという事件があったが、このときに随行した医師が中医で治療したという記録がある。その他若干の中医師の著作名の記録があるが、現物は残っていない。

1897年の日本統治時代初期の調査では、1070人の中医師がいたとある。

### 2. 日本統治時代

日本統治時代、日本漢方が明治政府によって廃止されたように、台湾でも日本政府によって中医が抑圧され、中医師が年々減少する一方で、薬局だけが増加するという歪な状況が生まれた。1931年の統計によると、薬局経営者2836人に対して中医師はわずか325名しかいなかった。1945年台湾が中国に復帰したときにはついに中医師は10名にまで減少、ほぼ壊滅状態にあった。日本統治

時代の日本漢方の文献はほとんど残っておらず、日本の方証相対論が当時の台湾中医にどのような影響を与えたかは不明である。台湾への方証相対の影響といえば、1970年代、1980年代に日本東洋医学会との交流のなかで受けた影響が大きい。

### 3. 1949年以降の台湾中医

1945年以来、大陸から多くの中医師が台湾へ移住してきたが、当時の政府は中医を軽視し、かれらに合法的地位を与えなかった。1966年に中国医薬学院に中医学系ができて、ようやく学院派の中医師が誕生することになった。現在教育機関は、中国医薬学院（後に大学に昇格）の中医学系と同大学学士後中医学系、長庚大学中医学系、義守大学学士後中医学系の4カ所。台湾にはこれらの教育機関で養成された学院派中医師のほかに、大学を出ていない民間の中医師を対象とする「特考」という特別試験に合格した中医師がいる。ただし、最近この特考の特別試験が廃止されることになった。現在医師の人数は55,900人、中医師は5,400人。

#### 台湾中医の流派と代表的人物

基本的に台湾中医は弁証を重視する。なかでも八綱弁証派が主流である。経方派と時方派の区別があるが、大部分は両者の折衷派である。

（黄碧松先生から流派と代表的人物の詳しい資料をいただいたが、ここでは割愛する）。

## 2 日本の方証相対論が台湾中医に及ぼした影響

1970年と80年代、大陸と台湾が戦争状態にあったため、大陸中医との往来はなく、もっぱら日本との交流が活発に行われ、日本の漢方書籍の翻訳が盛んに行われた。大塚敬節や矢数道明の書籍が台湾中医界の指南書となった。

漢方医師（台湾では「中医」のことを、日本の影響によるのではなく、ときに「漢方」と称することがある）はなによりも患者の症状を正確に把握し、同時に薬方の知識・方意を深く理解し、症状を診たらただちに頭の中で適切な薬方がイメージできるようになるべきだ。「方」と「証」は鍵と鍵穴の関係にあって、その関係性はきわめて重要であり、鍵が合えば錠前を開くことができる。とくに急性病ではほぼ絶対的なほどによく符合し、よく効く。慢性病のときは、かならずしも鍵が一致しなくても病が治ることがある。多少の時間はかかるが。

私はこういう観点をもっているが、これに対して日本の「方証相對」は伝統医学理論の「弁証論治」とは違っており、「弁病論治」に近いと主張する学者もいる。

### 3 大陸中医は劣化している

大陸中医と交流を重ねてくるなかで、大陸中医が中医治療の技術を放棄し、転じて弁証論治さえも投げ捨ててしまっている現状を目にしてきた。患者に対しては「儲け優先」に走り、西洋医学の検査や治療機器、手術を積極的に勧める。一部の中医医院の院長は「われわれの病院は中医専門医院であるが、中医薬に頼っていたのでは飯が食えない」「中医薬の特色はなくなり、中医医院は病院設立の本義を失ってしまった」「どうしても脱出の道が見えない」と慨嘆している。先日、広州で開かれた「全国中医医院院長フォーラム」では400名以上の中医医院の院長と中医薬専門家が参加して、「中医医院建設においていかに中医薬の特色を保持するか」というごく初歩的なテーマを巡って、たいへん熱のこもった意見交換が行われていた。私にとってはなにか非常に新鮮に映る風景であった。

広西中医学院の劉力紅教授は、著書『思考中医』のなかで、これから卒業する中医系の学生が中医に自信がもてなくて、中西薬を併用しており、発熱が3日で治らないときは西洋薬を使っている。もはや中医の世界ではなくなっていると書いている。さらに同書では、中医の古典教育が軽視され、徒弟制教育が消滅しているが、これは中医退化の象徴的なポイントだと語っている。

私は3年前に学生を連れて大陸のある中医治療センターを参観したときに、使用薬物の80%が西洋薬で、中薬は20%しか使われていないという現実を目にして、中医薬の退化がここまで来たかと愕然としたものである。現在の老中医500名が亡くなったとき大陸の中医は消滅すると誰かが言っていたが、その通りだろうと実感をもって感じる。

### 4 台湾中医が中医の聖地になるだろう

大陸の中医は「中」という名前を失っている。率直に言って、台湾中医こそ中医薬の聖地になっている、と私は考えている。去年の8月に遼寧中医薬大学から本科生と研究生が台湾に来て、台湾の数名の名医について診察を見学し

だが、学生たちは台湾のほうが「純粹中医」であること、中医の診療率が高いことに目を丸くしていた。

台湾中医が一般に臨床力が高いといわれるのは、保険制度に預かる点も大きい。台湾では中医と西医のライセンスは明確に分離されていて、中医は臨床において西洋薬を一切使うことができない。そのため、中医師は中医のもつ力だけで患者を治さなくてはならない。患者を確保するためには自分の治療能力を上げるほかない。台湾は大病院が少なく中医クリニックが圧倒的に多い。そのため中医学による臨床力向上が決定的な意味をもつ。

中医師の人数は全医師の14%にすぎないが、保険で受ける中医受診率は30%に登る。治療効果が低ければ30%という高さにはいたらないだろう。中医がいかに多くの患者から支持を得ているかを示すデータだ。

もう1つ、教育制度が充実していることも強調しておきたい。台湾では中医専門大学で7年制を採っている。学士後大学は10年。大学を出ていない人々への「特考」（特別試験）は特に厳しく合格率は5%だ。卒後継続教育も充実していてほぼ隔週に講習会が開かれている。年間30時間の講義を受けなくてはならず、濃密な教育だ。

劉力紅氏は著書のなかで、「厳しい環境のなかでこそ勇者が勝利する。台湾の置かれている環境はまさにそれと同じだ。……台湾はいずれ伝承中医の勢力となるだろう」と語っている。とはいえ、台湾中医も大いに問題点がある。多くの中医師は中医薬に自信が持てていないし、台湾政府の中医軽視の政策はいまだに目に余るものがある。

## 大陸中医への希望

中医学をやる限りは「中」という姓を大事にしてほしい。中医が主であって、西洋医学は補助である。中西医結合であつても中医理論を失ってはならない。中薬だけを使って中医理論を放棄してしまったのでは元も子もない。台湾にこんなことわざがある。盥で子供の体を洗った後、使い終わった湯を流すときに、子供も一緒に流してしまうような愚を犯してはならないということわざだ。ぜひ銘記しておいてもらいたい。

## 台湾のエキス製剤

台湾のエキス製剤の製造工場はGMP基準の認証を得ているものが118カ所ある。企業間の競争が激しく、質の高い製品が製造されていて、信頼できる。日本に単味エキス剤がないのは惜しい。複雑な患者に対応するためには単味エキス剤が不可欠だ。

不眠の患者には、普通複方の加味逍遙散を使うが、単味として夜交藤、合歡皮、酸棗仁などが使えればたいへん力強い。量と回数を増やせば煎じ薬と変わらない効果を発揮することができる。

東洋学術出版社会長 日本中医学会顧問 山本 勝司  
2012年5月